肥後歴史散歩

内乱と謀略の跡をたどる
―相良一族の戦い―

七百有余年の歴史を持つ相良一族。その永い歴史の中には骨肉相食む幾多の争いがありました。

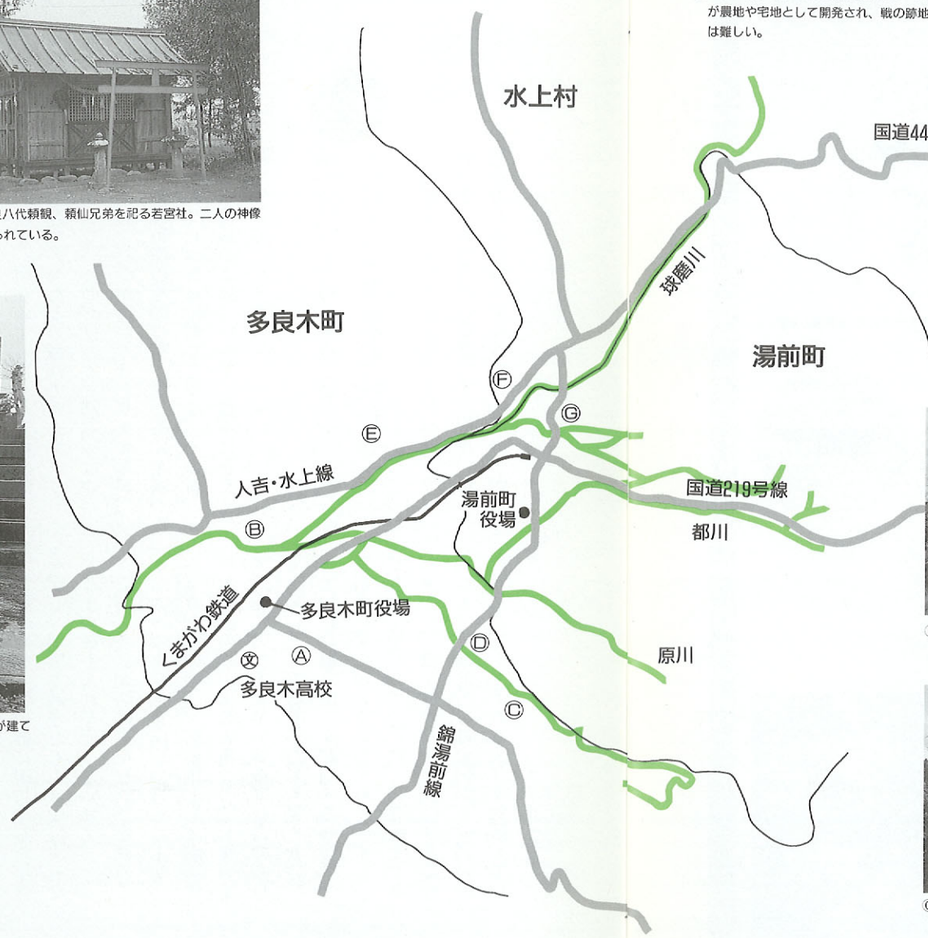
家督や領地をめぐる対立、家臣同士の権力争い…。それは戦国期、武士団統治における宿命ともいうべきものです。

相良一族の最終回は、これら内乱や謀略にまつわる説話を訪ねました。

Ⓕ生善院（猫寺）。敷地内の観音堂には盛誉の彫仏として阿弥陀如来、善女の彫仏として千手観音が祀られている。観音堂は国指定重要文化財。

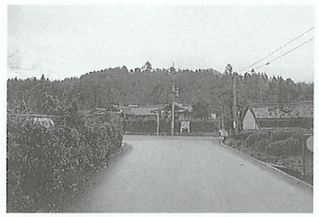
Ⓔ激戦が繰り広げられた獅野原付近。一面の原野だったが農地や宅地として開発され、戦の跡地を特定するのは難しい。

Ⓑ上相良八代頼観、頼仙兄弟を祀る若宮社。二人の神像が祀られている。



Ⓖ湯前城跡（皇宮神社）。

Ⓓ上相良家、下相良家の最後の決戦地・雀ケ森。竹林の中に無銘の石碑が残り、戦没者の供養塔といわれる。


Ⓒ久米城跡。山腹のひな段地形が昔の城の形骸を残す。

上相良、下相良の統一

相良一族宗家としての地位を奪回することは、上相良氏にとっての悲願であった。文安五年（一四八八）、上相良八代頼観、頼仙兄弟は下相良の家督を、幼少の堯頼（相続当時十一歳）が継いだのを好機に人吉城を襲撃。若年の堯頼は戦うことはおろか、寝返る家臣を統率することもできず、大隅国（鹿児島県）へと逃げ落ちた。

この報を聞いて不義・不忠極まりないと憤慨したのが人吉相良家庶流永留氏九代長続である。にわかに兵を集め、人吉城に攻め入り、頼観らを上相良（多良木地区）へと追い返した。こうして、人吉城を奪い返したものの、当の堯頼は「自らは当主の器に非ず」と帰城を拒んだ。しかも長続が説得を続けている間に、ふとした事故で堯頼は逝去。人吉城主の座は空席となってしまった。

ここで長続が多くの家臣、一族に望まれ下相良家を相続。兵をたてて頼観、頼仙兄弟を討ち取り、上相良一族は全滅。上相良家家臣団の名前も史上から消え去ってしまった。ここに上・下相良一族の完全統一が成立したのである。

孝女・千（せん）

さて、相良一族の統一から七十年ほど後、相良家重臣同士の内乱が起こった。東長兄（ながとものあに）と丸目頼美（まるめよりとし）の争いである。長兄に焼き討ちをかけられ湯前城に逃れた頼美は、城主東直政（なおまさ）と謀り先ず多良木城を攻め落とし、一気に人吉へ兵を進めようと企てた。

ところが、湯前城内に多良木城主岩崎長友（ながとも）の甥に当たる者がいた。この謀略を知り、何とか伯父長友に知らせようと考えたが城の警戒は厳重で、使者を送るようなすきはない。そこで甥は下女の千を呼び、策を練った。

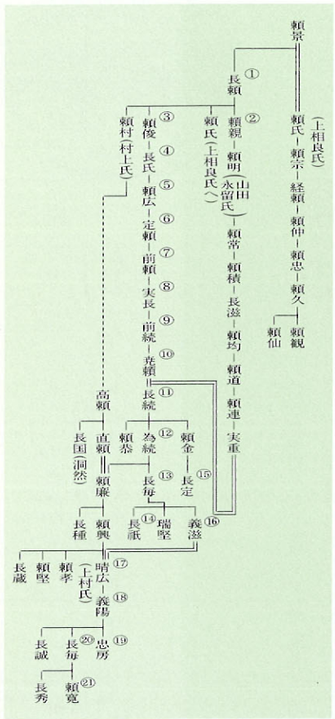
翌日、城の屋敷内から悲鳴をあげて女が逃げ出した。後ろから男が鞭をふりながら追いかける。城の大手門の番人に抱きとめられた女は鞭をふるう男に「いくら逃げてもどうせ追い討ちをかけられるのなら、都川に身を投げて死にます」と荒れ狂い、門番をつきとばして門外へ飛び出した。男は「たかが女一人、生きようと死のうと構うな」と捨てぜりふをはいて城内へ戻って行った。この男が長友の甥であり、飛び出した女は下女の千であった。

千はそのまま多良木城まで駆け抜け、城主長友に、この急を知らせた。長友は直ちに人吉へ急使を出し、人吉軍はまもなく出兵。湯前勢と獺野（うそんぱる）原に戦い、これを討ち破った。

千の命をかけた行動が戦の勝敗を決めたのだった。

Ⓐ千の墓。天明年間（1781～88）に岩崎氏が建てたと伝えられる。

相良氏略系図



猫の怨念が無念を晴らす

両軍ともに数百名の死者を出した、獺野原の合戦から二十年余り、十九代藩主になったのはわずか九才の忠房であった。これに対し、湯山の地頭湯山宗昌と弟の普門寺住職盛誉が謀反の計画を立てているとの噂が広まった。これを聞きつけた藩は天正十年（一五八二）、普門寺に討っ手を差し向けた。ところが噂は誤りであることが分かり、あわてて討伐中止の使者が送られた。しかし、使者は不覚にも途中で焼酎に酔ってしまい、中止の報は間に合わず、普門寺は焼かれ、盛誉は斬殺されてしまった。盛誉の母玖月善女は嘆き悲しみ、自分の指をかみ切って血を愛猫の玉垂になめさせ、呪いをかけて自害した。

間もなく、盛誉を切った侍と焼酎に酔った使者は相次ぎ急死。忠房も十三才の若さで亡くなるに至り、猫の怨霊とささやかれ始めた。その後も怨霊は城中を悩ませ続けたので、二十代藩主長毎は寛永二年（一六二五）、盛誉、玖月善女、玉垂の霊をなぐさめるため普門寺跡に生善院を建立。盛誉の命日には藩主みずからこの寺に参詣した。これでようやく怨霊のたたりはおさまり、以後この寺は猫寺と呼ばれるようになった。

参考文献
上相良藩興亡史　園田健昌 著
熊本の伝説　荒木精之編著
―熊本の風土とこころ⑨

取材協力
湯前町教育委員会
多良木町社会教育課